

「知事とのフレッシュトーク」(平成28年10月14日実施)の概要について

「知事とのフレッシュトーク」は、知事が高校生の皆さんと県の未来について意見交換を行うものです。

平成28年10月14日(金)に十和田市の県立三本木農業高等学校において実施した、「知事とのフレッシュトーク」の概要をお知らせします。

◆開催◆

【意見交換】

○ 発言者1(3年、男子)

青森県には、豊かな食文化、美しい景観、多種多様な伝統工芸品が存在しています。

しかし、青森県では、少子高齢化や過疎化によって限界集落や消滅集落が深刻な問題となっています。また、そういった人口減少から地域文化の消滅も問題になっています。

そういった中で、私たちは「きみがらスリッパ」を地域資源として活用し、経済効果を生み出すことで地域文化の継承と地域活性化を図りました。

そういった活動の中で、国内需要だけでは限界があり、インバウンドや海外への販売も含めた活動をしていくことが必要だと分かりました。

そこで知事にお聞きしたいのは、青森県では、インバウンド戦略として、こういったことを重点にしているのか、新幹線や空路などの関わりも含めて教えていただきたいです。

また、海外市場の開拓と輸出に対して、こういったサポートがなされているのか、また、この地域を重視しているのかなど県として推進している方向性を教えていただきたいです。



○ 知事

インバウンドや国際化の話が出ていました。上北地域の中学校、高校に大変協力いただいています。外国からのお客様が非常に増えています。黙っていて増えたわけではなく、対策を随分と取っています。例えば、12月末になると、台湾から「知事、りんご、いつ来るの?」と電話がきます。「OK、OK、全部OK」と答えます。こうやって営業に行っています。韓国、台湾、香港、中国にも、足をちゃんと運びます。ただ、足を運ぶだけではなく、旅行業界や航空会社を丁寧に回り、「青森に来てください、青森にはとっても楽しいコンテンツ、例えば、秋はきれいですよ、きれいな八甲田に今は雪がかかっていますよ」と写真を見せながら、青森の良いところをいっぱいPRしています。

また、商品造成とありますが、「三本木農業高校では田植え体験ができます、津軽地方ではりんごもぎ取り体験ができます、青森楽しいところだよ、どんどんおいで」というようなキャンペーンをしています。今まで行っていませんが、ごぼうほり大会も面白いと思います。学校も

回っていますが、子どもたちが大きくなっても青森は良いよと言ってくれます。この秋もりんごのセールスや最近よく売れるサバの缶詰のセールスに行ったり、中学校、高校を回って、前に青森に来てくれた子供たちに「また、青森に来てね」と声をかけに会いに行ったり、旅行会社や航空会社を回ったり、台湾の政府機関と農薬規制の話し合いまでしてきます。台湾では、青森がテレビドラマの舞台になりました。さらには、中国から函館と青森に来てくださいと中国に行ってキャンペーンをしたり、韓国の有名な俳優の方に写真をいっぱい撮ってもらい、「青森ってきれいなところだね」とどんどん宣伝してもらっています。冬の八甲田のキャンペーンも海外で行っています。オーストラリアからのお客様は、最初200人ぐらいだったのが、今は2,000人を超えて、伸びています。また、新幹線開業と連携して、「立体観光」といいますが、飛行機で飛んできて、新幹線やフェリーであちこち回ってもらう取組も進めています。

○ 誘客交流課職員

韓国からは、最近、ヒーリング、癒しと言われていますが、青森の新鮮な空気、水、景色を味わいに青森に来ます。また、近頃は、中国の観光客が伸びてきています。「爆買い」も一段落し、日本でなければ体験できないもの、日本らしいものを求めて旅行に出かけるようになっていきます。人気があるのは弘前城です。弘前城の中で着物やカツラを被って、お殿様、お姫様の姿で写真を撮る体験コーナーが非常に人気です。また、ねぶた祭り、三社大祭などお祭りも人気ですので、そういった青森ならではの文化もPRしています。

○ 国際経済課職員

県庁職員にも予算にも限りがありますので、まず輸出戦略を作り、ターゲットを主に東アジアと東南アジアに絞っています。

青森から輸出される農林水産物の1番はりんごで、2番目はホタテです。皆さんの地域でなじみのあるナガイモは、まだ数が少ないのですが、主にアメリカに輸出されています。ニンニクは、日本では大きく真っ白な福地ホワイトが一番良いニンニクとされていますが、タイで一番高いとされるニンニクは、小指の爪くらいの小さい粒のニンニクで、一番大きな粒のニンニクは、一番安いニンニクと扱われています。

ですので、私たちが一番良いと思っている農林水産物も、持って行く国によっては、全然価値が認めてもらえないということがよくあります。日本国内で売る時もそうですが、自分たちの作ろうとしているもの、売ろうとしているものを誰が買ってくれるのか、この価値は誰が認めるのかということをよく考えてもらいたいと思います。

○ 知事

マーケティングといいますが、しっかりとマーケティングして、相手が必要なものを狙って、職員が最初の道筋を開くと、私も出かけて行き、向こうの経営者などいろんな方々と話し合いをして、青森県産品を買って行ってもらいます。

一昨日から、香港の最大の食品流通の方々々が青森に来ていて、今日は、野辺地でホタテを食べてもらっています。そういった方々を招いて、県内を見てもらっています。私も実際に香港

アドに足を運びますし、向こうからも青森に来てもらっています。そして、必要なもの、例えば、流通の仕組みをきちんと整えた上で売りに行く。結構こまめな仕事で、大雑把にフェアをやっているだけのように思われますが、かなり戦略的に行っています。

○ 発言者2（3年、男子）

私は、動物科学科で様々なことを学び、自分の将来や青森県の畜産について真剣に考えることができました。その中で、様々な人から話を聞いたり、我が校の施設と異なる最先端の畜産関連施設に見学しているうちに、自分自身も将来の青森県の畜産を支える後継者を育てたいと思うようになりました。



しかし、私の同級生にも畜産後継者を目指す人はとても少なく、私は、将来の青森県の畜産に不安を感じています。私は、青森県の畜産を青森県民にもっと知ってもらう必要があると思います。

そのためにも、県内各地で積極的に畜産に関するイベントを開催してみてもどうでしょうか。

例えば、全農や各地域の農協、畜産協会、畜産に関する学校などと協力して、青森県畜産フェアを大々的に開催し、県産の肉のおいしさや牛乳のおいしさをPRしながら、青森県の畜産の現状を知ってもらうことが必要だと思います。

そして、このような活動が県民の興味や関心をもってもらうことに繋がるのではないのでしょうか。

○ 知事

大変良い意見、青森県に必要なことを言ってくれました。青森県には、尖がっている、これぞという畜産をやっている人たち、例えば、営農大学校を卒業して、六ヶ所の畜産農家に修行に出て、賞を獲った人など、結構やるぞという人がいっぱいいます。深浦の方にも賞をいろいろと獲った子どもたちもいます。畜産農家の数は減っていますが、絶対に畜産を頑張らせるぞという人たちがいっぱいいます。

畜産農家の数としては減っているかもしれないけれども、畜産が県の農業産出額の占める割合は第1位。やはり恵まれた条件 - 涼しいから、薬をあまり使わなくてもいいし、虫やアブが湧いてこない - にあります。また、飼料用米もたくさん県内で作っています。早い時期から県産のもので対応するという仕組みを作りました。畜産の産出額880億円と、少数精鋭で、頑張る人たちがぶっちぎって頑張っているという状態です。

大畜産祭りは、今年は7月に開催しました。また、後継者育成のための大会を開催しています。今度、宮城県で5年に1度の全国和牛共進会があります。このような大会で青森県の牛が賞を獲ることも目指していきたいと思います。新規就農者がどんどん入れるような仕組みをやっています。

○ 畜産課牧野課長代理

後継者が少ないので、今年から特に力を入れて取り組んでいます。

先日、1年生の皆さんには、ブロイラーの生産から処理するところまで見てもらいましたし、2年生の皆さんには、大規模な酪農家に行き、どうやって牛の餌を作っているのかやロボット搾乳なども見学してもらいました。

畜産のPR活動も、青森市で大畜産祭りをやっていたけど、明日、八戸市のはっちで、県も協力して八戸地域の畜産フードフェアが開催されます。ぜひ、皆さん、お友達を誘って行って、畜産物を食べて畜産をどんどん理解をしてください。

○ 知事

お話ししたようにいろいろなことに取り組んでいます。ただ、我々のPRが足りないのかもしれないのかもしれない。

さきほどいったとおり、畜産の産出額880億円というように、青森県の畜産は元気です。例えば、首都圏の卵の半分は本県が出荷していますし、大手食品メーカーのハムを製造する主力工場も本県にたくさんあります。

我々は、しっかりとこういうシステムを作っています。ただ、青森県の畜産の一番の悩みは、青森で獣医になってくれる人が少ないことです。

○ 発言者3（3年・男子）

私の家では、今年6次産業事業者として認定され、畜産業を中心とした会社経営をしています。元々祖父が畜産業を営み、粗飼料の生産・販売を行ってききましたが、赤身でヘルシーな日本短角牛を完全地域生産飼料で肥育させ、直営レストランで提供しています。野菜も地元のものを提供していきます。

また、日本短角牛は、脂肪分も少なくヘルシーで短命県脱却の一因にもなり得るのではないかと考えています。

我が家の6次産業化は、地域の活性化やT P P対策も含めた取組です。私は、将来、家を継ぎ、地域を巻き込んだ取組を進めていきたいと考えていますが、青森県では、6次産業化を今後どのように活用していきたいと思っていますか。また、青森県としてのT P P問題に対しての対策は何かありますか。



○ 知事

将来、しっかりと地域を支える畜産農家になってください。君のお祖父さんの頃からですが、農水大臣賞を取ったりと、本当に一生懸命努力してきた君のお祖父さん、お父さんに感謝しています。青森の畜産を守って、守り抜いてきてくれました。

6次産業化の話が出ましたが、皆さん、6次産業化とはどういうことでしょうか。先生に聞

いてみましょう。

○ 先生

農業、漁業の1次産業と加工業の2次産業、そして販売する3次産業、1と2と3を足して6次産業ということで、これらを1つのセットとして、やっぴこうという新たな取組です。

○ 知事

1、2、3も6なので掛け合わせてもいいのですが、6次産業化の魅力は、加工や流通に従事する人が生まれることで、地域にたくさん雇用、働く場を作っていけることだと思います。本県は、早いうちから6次産業化に取り組んでいて、認定件数は全国9位です。なおかつ、いろいろなパターンを認定しています。6次産業化には、技術がない、ノウハウを持っていないなど、いろんな課題がありますが、県として応援する仕組みを作っています。

農林水産業は儲からないと絶対駄目だと思っています。「攻めの農林水産業」を13年間取り組んできました。どこへでも行き、どんどん販売の仕組みを作ってきました。なぜ、「攻めの農林水産業」を進めてきたかという、収益を農山漁村集落に持って帰りたいという思いです。作ったもの、加工したものがどんどん売れて収益が返ってくる仕組みを作らなかったら、絶対、農林水産業は強くないという気持ちで仕事をしてきました。このようにTシャツを着て、りんごのおじさん、ながいものおじさん、米のおじさんになって全国、世界を歩いてきたのは、そういう思いです。まっしぐらは、輸出も含めて絶好調です。

そこで、大事なのが、君が言ってくれた6次産業化です。加工して、それを自分で売するための勉強を皆さんもしていると思います。これを「農商工連携」と言います。要するに、売る側、加工する側が生産する側とお互いに技術や資本を出し合うことです。

○ 総合販売戦略課職員

県では、まずは「農」にしっかりと良いものを作ってもらい、それを「工」で食品製造業者の方に加工品を作ってもらい、さらに「商」で流通のラインに乗せて販売してもらおうといった、農・商・工、それぞれの得意分野を生かして連携して、本県の農林水産物をどんどん売り込もうとしています。

6次産業化を目指す農林漁業者からの相談には、自分たちでどういうものを作っていて、どこに売っていきたいか、一緒に相談しながら、商品づくりに対して専門家がアドバイスをしています。平川市のりんご園のりんごジュースやドライアップル、つがる市のラズベリーのドレッシングやジャム、キャンディなどいろいろ作っています。ここは、もともとは建設業者ですが、農業参入をして、ラズベリーを栽培しています。自分たちは生産ラインを持っていないので、七戸町の飴屋の方にキャンディを作ってもらったり、弘前市でジャムを作ってもらったり、農商工連携で商品を作っています。年間400件ぐらい相談を受けていて、年によっては50～60商品の新商品を作り出しています。

○ 知事

ここはきちんと話しておきたいのですが、なぜ、6次産業化をこんなに進めているかとい

うと、例えばりんごを生果で販売した時の利益が20円だったとします。これをジャムに加工すると、利益が200円に増えます。さらに利益が増えるだけでなく、加工の現場で働く人が生まれます。さらにそれを販売する時に雇用や利益が生まれます。要するに、生産したものをそのまま販売すると20円の利益しか生み出さないけれど、加工や流通まで参画することで、雇用を生み出し、さらに利益も200円、300円と増えていきます。その利益が、県内で循環していきます。

ちょっとわかりにくかったかもしれませんが、1次産業だけでなく、2次、3次と活動の範囲を広げることで、青森で働ける人を増やし、より多くの収益を生み出したい、そういう気持ちで取り組んでいます。

○ 発言者4（3年・男子）

青森県には、岩木山や八甲田山などの緑豊かな美しい景観が広がっています。それらの美しい景観を支えている要素の1つに農村や田園の風景があげられています。しかし、年々増加していく耕作放棄地がこの美しい青森の自然を損ねていると考えています。その背景には、若者の農業離れが深刻化していることではないかと考えました。

そこで、青森県、市町村、地域住民、農業高校生らが協力し、「農業応援プロジェクト」などのプロジェクトを立ち上げ、若い人たちにもっと農業の面白さや楽しさを知ってもらえればと思います。

まずは、県内外の中高生や若い人を中心に職業体験の一環としてPRをし、もっと農業を好きになってもらえれば耕作放棄地の有効活用ができ、同時に減らすことができるのではないかと考えました。このプロジェクトを通して、これからも青森県の素晴らしい農業が更に発展し、美しい景観を未来へと受け継いでいく1つの要因になるのではないのでしょうか。

○ 知事

とても良い提案です。私も同じ考えです。

県として、今、強力に進めていることは、環境を保全して、環境と調和するための農林水産業の在り方と公共投資という「環境公共」を行っています。青森県独特の取組でしたが、全国のいろんな人たちが参加してくれるようになりました。

農業、農村を守っていくために一番大事なことは環境保全です。きちんと木を植えたり、水路のネットワークを整えたりすることによって、きれいな水がきちんと流れる仕組みを作ること積極的に進めています。農業、漁業は環境を壊すのではなく、環境を守るためにあり、我々が自然と一緒に生きていくためにとても大切ということをどンドンアピールしています。

例えば、水路を造る時に、地域の住民の方々にも参加してもらい、水路の泥上げをしたり、メダカの道を造ろうとしています。そういう形で、みんなが農林水産業とその現場を理解して、環境を守るためにこれだけ頑張っているのが農林水産業だということ知ってもらうための取



組を続けています。

農業に進んでくれる人は確かに減っていますし、耕作放棄地も増えています。耕作放棄地を減らすためにも、この環境公共の中で、草地にしたり、山には手を付けずに木の間伐をするなどの取組をしっかり進めています。また、地域での話し合いや担い手への土地の集積、耕作放棄地の再生利用も進めています。新規就農も、Uターン、Iターン、Jターンなど、農業に対していろいろな参加の仕方がありますが、段取りをしています。

「攻めの農林水産業」を進めるようになってから、すごく農業経済が良くなっています。農家の子どもたちであれば感じていると思いますが、畑作、野菜の価格がとても高いです。りんごの販売額が1千億円、ほたての漁獲金額が260億円になるなど伸びています、収益がどんどん農業に集まっていくようになったら、農業で食べていけるようになります。農家戸数は減っていますが、規模は拡大しています。そして、新しく農業に就く人が、年間300人近く戻ってきて来ています。

また、応援団を増やすために、グリーンツーリズムも行っています。国内からは約6,000人の人たちが、海外からも「青森の農業ってすごいな、楽しいな、漁業って面白いな」って青森へ来ています。

こういったことを続けている中で、農業従事者の平均年齢が若返ってきています。年間300人近い新規就農者が入ってきてくれるからです。東北一の若さというぐらいに青森県の農業は、今、元気になっています。もともと若い世代がやった農業地帯である北海道は別格とすれば、昔からの農業地帯である青森県が2番目です。東北は、平均年齢66歳になるまで、新しく農業を始める人が来なくなりました。青森県では、いろいろな工夫をして、「食べていきますよ」「農業する環境が待っていますよ」とPRしています。グリーンツーリズムを行って、子どもたちにどんどんPRもしています。

○ 構造政策課職員

農業クラブで、地元の方々とプロジェクトを組んで活動をしていきたいと考えているのであれば、ぜひ、地域県民局農業普及振興室に4Hクラブという若手の農業者の集まりがあるので、そういった若手の農業者の方々と一緒に活動していければと思います。

若手農業トップランナーとして、尖った方、地域の農業を率先してリードしていくぞという方、年間約20人が、自ら勉強して、県外に生産した農産物、作った加工品を販売していく取組をしています。今までに146組の方が巣立ち、県内の農業を引っ張っています。皆さんも農業に就いて、トップランナーとして活躍してください。

○ 知事

県知事としてというよりも、地域の一人としてずっと言い続けてきたことがあります。セールスで歩く時も言い続けてきていますが、我々青森県は「水・土・人」を一番大事にする農林水産業を進めています。

水でいえば、知事に就任してびっくりしたのは、水路のネットワークです。八甲田山系や岩木山系のブナ林の水がきちんと平野まで流れて、それが良い栄養分となって、農業用水、取水の元となります。1万1千キロの水路のネットワークの切れているところをどんどん直させ

ました。

土については、日本一健康な土づくり運動を行っています。9割を超える農家の方々が健康な土づくり運動に参加してくれています。十和田も早い時期から取り組んでいます。土壌分析して、健康な土にするためには窒素が多すぎでは良くない、ケイ酸が足りないよとアドバイスをしています。

そして、農業トップランナーですが、これから農業を引っ張っていく、尖がっている人たちをどんどん作ってきました。

目に見えないですが、我々の農林水産業に大切な水、土、これを徹底して改良していきます。加えて、次の時代を引っ張る、会計、マーケティング、どういうものをどこに売ったか分かる人づくりということをしてきました。

これが、青森県の農林水産業、攻めの農林水産業の見えないけれども、とても大切にしてきた部分です。だから、この青天の霹靂でも、野菜でも、魚でも、「青森のものは、何でこんなに美味しいんですか？何でこんなに良いものができるんですか？」と言われれば、「水」と「土」、そして、それを作っている「人」がすごいからと言いつけてセールスに歩いています。

○ 発言者5（3年・女子）

私は、農業高校で学んだ知識と農業が盛んなこの青森県で育った経験を生かして、生産者への感謝の気持ちや食材がどのようにして育てられ、消費者のところに届くのかを食育に関連づけて多くの人に伝えることのできる管理栄養士を目指しています。



食品には、必ず生産者がおり、その裏には生産者の皆さん、一人ひとりのストーリーがあります。私は、そのことを伝えていくことが、これからの管理栄養士の使命であると感じています。その使命を果たすため、生産者の大変さや自分で作ったものを誰かに食べていただくという喜びをこの三本木農業高校で学びました。

また、私は昨年、青森県産品と三農で獲れた農産物を活用した「三農MO-MOパン」の開発に取り組みました。

その経験から、農産物の生産から加工、流通、販売までの流れを理解することができ、私の大きな財産となりました。1つの商品を作るまでには、多くの人の手が携わっており、努力の結晶と様々な想いのもと、作られていることも分かりました。青森県が、そして日本が豊かであるためには農業が必要不可欠と言っても過言ではないと私は思います。しかし、農業は自然条件に左右される産業でもあり、一生懸命努力しても、収入が安定しません。

そこで、農家で作ったものを少しでも高値で取り引きしていただくように、これからも三村知事には、県産品を国内だけではなく、国外にもPRを続けることをお願いしたいと思っています。

三農生にも、将来、農業自営を目指している人や私のように食に関わる仕事を目指している仲間が多くいます。今後の農業経営、加工や商品開発、食に関わる仕事などで女性に期待される役割について三村知事はどのようにお考えですか。

三農生にも、将来、農業自営を目指している人や私のように食に関わる仕事を目指している仲間が多くいます。今後の農業経営、加工や商品開発、食に関わる仕事などで女性に期待される役割について三村知事はどのようにお考えですか。

○ 知事

女性は、とても丁寧に仕事をしてくれるという特性があります。だから、13年前に「青森の正直」という言葉を使うことにしました。生真面目にコツコツ、本当に良いものを作って、安心できるもの、安全なものを作って、全てのお客様、消費者に食べてもらう仕組みを進めていこうとした時に、一緒に頑張ろうと言ってくれたのが、V i C・ウーマンという女性の農業者の方々です。

女性農業者は、チャレンジする人が多く、例えば、漬物の加工で1億円も稼ぐなどとても元気です。みなさん、私のものを食べて元気になって欲しいと言っています。そして、地域でお父さんたちができないような、ちゃんと帳簿を付けて、ちゃんと利益をどんどん出すこと、農家レストランの経営も進めています。これから、どんどん女性が活躍することによって、ますます地域経営、農山漁村が元気になっていくことを期待しています。

そういう方たちと、あなたが、同じ気持ちでいてくれることを嬉しく思います。正直に良いもの、安全・安心、おいしいものをお客様、消費者の皆様へ届けたい気持ちと一緒に仕事してくれたら嬉しいです。

あなたの夢である管理栄養士の話をすると、子どもたちにも食を通じて、地域の味、本当の美味しさを伝えていくことを頑張りたいと言っています。青森県は肥満傾向ですが、管理栄養士の方々が、肥満にならないように、健康に育っていくための仕事をしてくれています。ぜひ、ローソンでの経験を生かして、管理栄養士として頑張ってください。

○ 総合販売戦略課職員

県産品にはたくさん美味しいものがありますが、美味しいということ伝えるだけではなく、産地の強化やブランド力の向上に取り組んでいます。知事をトップに県内外の量販店で売り込みをしています。県産品を売るにあたっては、生産者の思いや食材の魅力をまず直接伝えて売っています。

○ 知事

例えば、来週は、大阪のスーパーでセールスをしますが、そこにホタテの生産者も一緒に行って、青森のホタテがどういうふうで作っていて、それだから美味しいということを生産者に話してもらいます。また、大間のマグロ解体ショーを行い、お客様が集まってきたら、ホタテもイカもすごいし、サバの缶詰も美味しいですよと話しています。「青森県若手生産者まごころ伝え隊」という生産者の人たち、青森の生産者はものすごく真面目につくっている人たちと一緒にいき、どのような気持ちでナガイモを作っているか、土づくりはどうしているかを話してもらったり、実際に土を持って行ってお客様に匂いを嗅いでもらいます。どうして土の匂いまでこんなに甘いのかって聞かれたら、真面目に土づくりをやっているからと答えています。秋、冬の土、日曜日のほとんどは、広島に行き、中国、四国、熊本、沖縄、マレーシア、台湾と暇なく、営業、セールスに行っています。

青森の本当においしいものをどんどん理解して欲しいし、どんどん食べて欲しいし、青森の生産者に収益が返ってくるということを願って頑張っています。70億円でスタートした大

手量販店通常取引額は270億円まで伸びました。「決め手は青森県産品」、県産品それぞれに命を育んでくれる皆さんの思いが込められています。

○ 国際経済課職員

海外への販売についてですが、青森県の農水産物の一番の輸出品目は、りんごです。2年連続3万トンを超えという目標を達成しました。青森で1番作っているりんごの品種は「ふじ」ですが、「ふじ」は世界のいろいろな国で作られています。出張先でその国の「ふじ」を見ますが、青森で見る「ふじ」のりんごとは、色も形も味もまったく別物です。輸出されるので価格は、その国で作っている「ふじ」よりも高いですが、青森の「ふじ」は美味しいから、その価値を分かって買ってくれます。同じ「ふじ」なのに、なぜこんなに美味しいのか、見た目もきれいで立派なのか、どうやって作っているのかを細かく説明して売ることによって、りんごの輸出が毎年伸びています。

お米も、この地域で作っている「まっしぐら」の輸出量がどんどん伸びています。オーストラリアでは、日本食は回転寿司、お寿司、海苔巻がすごく人気です。そのお米は、他の国の比較的に安いお米を使っていますが、それを「まっしぐら」に変えてもらえるようセールスを進めています。実際、食べ比べると「まっしぐら」は美味しいと皆さん喜んでくれますが、お店で使うにはちょっと価格面で厳しいという答えが返ってきます。でも、人間は、1回美味しいものを食べて、またそれが食べたくなると思うので、次に買う時には「まっしぐら」を選んでもらうようにさまざまな作戦を練って、知事と一緒にPRを進めています。

○ 知事

確実に売るための戦略を立て、売り先をきちんと揃えた上でロジスティック（物流）を整えて、国の承認まできちんと行う形で国内外とも販売を伸ばしてきました。これからも、この姿勢で進めていきます。安心して一生懸命に良いものを作り、加工し、皆さんと県が一緒になって、必ず農村漁村に収益を集めるようにします。

A! Premiumの話をしていきます。今まで青森県の生鮮物、例えば、生のホタテやヒラメ、タコ、朝採りのいちごとや本当にギリギリまで完熟したトマトを次の日の午前中にクール便で届けることができたのは日本の7.5%の地域だけで、本当に良いものを売れない状況が続いていました。そこで、宅配業者と航空会社と連携して、翌日の午前中の配達を可能な地域を九州の北部と沖縄本島まで、一気に約90%に拡大させました。さらに、香港、台湾、上海にも、その次の日に届く仕組みを作って、青森の経済、農林水産業の経済を良くするために取組を進めています。これをA! Premiumといいます。既に年間3500個程度取り扱うようになりました。

○ 発言者6（3年・女子）

私は、食農科学という授業で、郷土の伝統料理や地域資源、地域文化について学んでいます。

授業を通して、ひつつみ、なべっこ団子、串餅など、様々な郷土料理を実際に作り、何故、このような食文化が残っているのかについて理解を深め、新しい発見をすることができました。

先日、むつの郷土料理の食物に関する書籍が出版され、関東で話題になっていることがテレビで紹介されていました。

一方で、郷土の食文化や伝統芸能など、若い世代が継続的に継承していく機会が減少すると、地域の文化や人と人との繋がりが希薄になってしまうことを心配しています。

このため、私たちの郷土に伝わる大切な食文化や芸能が、これからも若い世代に受け継がれていくような場面に高校生がどんどん関われるチャンスを作りたいと思っています。

また、青森の食文化や芸能を全国に発信したり、普及させる取組及び古き良き技を伝承する後継者育成について、どのように考えていらっしゃるかお尋ねしたいと思います。



○ 知事

さきほど、ゆりかごを守りたいと言いました。農山漁村集落で、我々は食べるものを作り、子ども、命を育み、そして文化を守っています。この3つの命を守ることが私の大きな仕事だと思って頑張っています。

命を守る食を守ろうと進めている「あおもり食命人」について担当から説明させます。

○ 食の安全・安心推進課職員

「あおもり食命人」の意味するところは、「命を支える食を作る人」です。平成25年から始めて4年目になります。「あおもり食命人」と言われる方々は、明日、そして10年後、20年後も元気でいられる体を作るための食を考えていこうという考えに賛同してくれた県内各地域の調理人の方々に、現在約153名登録しています。

制度上は調理人の方が登録されていますが、当初の私たちの思いというのは、県民の皆さん全員が「食命人」と言われるような青森県にしていきたいというものです。というのは、調理人だけでなく、一番の根っことなる家庭で料理を作り食べさせ、そうして家族たちを守るお父さん、お母さんがそもそもの「食命人」と思っています。

○ 知事

伝統的な食とは、保存も考えるけれど、健康をものすごく考えることが元になっています。だから、新たに「食命人」の運動を起こすことで、みんなで食のこと、食べることを考えて欲しいと思っています。そして、もちろんファーストフードもよいのですが、伝統的な食の大事さを伝えることを地道に続けてきました。

○ 食の安全・安心推進課職員

「食のおはなし会」という取組を「あおもり食命人」の事業の中で4年間続けています。保育園から高校、一般の団体で、年間40か所程度、食の大切さ、命を支える食についての講義を続けています。

郷土食を伝えることも食育もとても大事です。ただ、食の大切さは分かっている、家庭でやっているかというとやっていない方々がとても多いことが課題です。食文化の伝承の根っこは家庭にあり、自分たちの家でご飯とみそ汁という体を作るものをまず一番大事にし、そして、おかずという心を作るということの意味を考えて欲しいと思います。その上で、それぞれの郷土の中での食文化、郷土料理を特別なものではなくて、ご先祖様から代々、その土地のものを使って食べ繋いできたと本当は日常的なものであって、それをそれぞれの家庭の中で続けていくことが一番の食文化の伝承だと考えて、活動をしています。

また、「あおもり食育サポーター」という事業も行っています。現在約180名の方が「食育サポーター」としてボランティアで料理教室を開催したり、食の大切さを伝える活動をしています。中には、高校生の方もいます。食育サポーターになるには、毎年6月に行われる「あおもり食育検定」に合格した人などです。このようなサポーター登録制度を活用して、多くの人に食の大切さや郷土食の文化を残すことの大切さを伝える活動を続けていきたいです。

○ 知事

青森県には民俗芸能がたくさんあり、十和田の切田神楽も大変に高い評価を受けていますが、子ども民俗芸能大会や発表会があるといういろいろな頑張ってくれていますので、こうやって繋がっていくように頑張っています。

集落、部落、こういう祭りを守ってきた、命を育ててきた、食を作ってきた集落が、人口減少で無くなれば、文化もお祭りも無くなってしまいます。だからこそ、こういったゆりかご、我々のゆりかごを守るための攻めの農林水産業を全力で続けてきました。

TPPの話ですが、TPPと戦っていくからこそ、攻めの農林水産業です。逆に言ったら攻めてくる前に攻めに行っているという気持ちで対TPPのいろいろな対策を行っています。良いものを作り、確実に売り抜けていくということです。今まで作った販路では、逆にTPPで輸出しやすくなっています。向こうが攻めてくることに対し、残留農薬の分析などきちんと示していき、「日本のお客様、どちらを選ぶのですか？」としか言えませんが、そういうことを含めて対策をとっていきたいと思っています。対TPP、これだけ攻めの農林水産業を頑張ってきた青森県、負けていられない気持ちです。

